

# Do-Re

## 北海道立図書館レファレンス通信

23 (通巻27号)

平成18年3月9日発行

### 【目次】

こんなのきました - 参考調査課によせられたレファレンス - 【26】 大切にしたい思い出を図書館の資料で .....	1
こんなのあります - いちおしレファレンス・ブック - 【16】 懐かしの歌を探す .....	2
● 市町村のみなさんからの発信 【14】 レファレンスに王道なし 登別市立図書館 館長 清野良憲さん.....	3
《特別寄稿》コピー・レファレンス の悪夢 筑波大学図書館情報メディア研究科 教授 山本順一さん .....	4
● Librarian s Box (ししょぼこ) 【13】 翻刻資料の探し方 - 日本史を中心に - .....	6
デジタル・ライブラリアン講習会<北海道短期集中コース> 報告 .....	7
課員のつぶやき - 日々の業務からの短信 - 【15】 『北海道雑誌新聞総合目録』編集作業を終えて.....	8
市町村図書館職員レファレンス体験研修 (レファ研) ~ 新年度もステップアップを目指しましょう ~ .....	9
● News .....	10
1 今年度レファ研の全日程が終了	
2 国会図書館 HP にテーマ別調べ案内項目が新規追加	
3 『判例時報』に「船橋市西図書館蔵書廃棄事件」判決録	
4 「著作権法第31条の運用に関する2つのガイドライン」まとまる	
5 道内の司書教諭「読書指導体験記コンクール」で優秀賞受賞	
6 平成17年度北海道教育庁専門職員研修会開催	
7 札幌篠路高校で「くすみ書房」社長が講演	
8 文科省「新しい時代の社会教育」パンフレット作成	
9 「北の図書館」のホームページ見てますか？	
10 特集：レファレンス！一歩前へ	
11 情報源ア・ラ・カルト	
12 「貸出文庫」3タイトル増えました。	
編集後記 .....	12



北海道立図書館

HOKKAIDO PREFECTURAL LIBRARY

## こんなのきました - 参考調査課によせられたレファレンス - 【26】

### 大切にしたい思い出を図書館の資料で

もう何年の良き出来事をふと思い出し確かめたくなくなることがあります。それが家族や自分自身のことであればなおさら大切にしたい思い出として心に刻みこみたいものです。今回は、思い出に関わる事例の紹介です。

Case : 松本清張の書いた「トップ記者」という作品を読みたい。どの本に収録されているか。

ある図書館からのファクシミリによる照会でした。照会文には上記の事柄しか記されていないかったため、記載のタイトル・著者で書誌の事項を確認するため、NDL-OPAC、Webcat、市販MARC等を調査しましたが、確定することができませんでした。幸い松本清張には次のような事典・書誌類があるため、こちらも繰ってみましたが全くそれらしき著作が見当たりません。

[事典・書誌類] < >内、当館請求記号

- ・『松本清張事典』(勉誠出版 1998) <910.268/MA>
- ・『松本清張事典 決定版』(角川学芸出版 2005) <910.268/MA>
- ・『松本清張書誌 作品目録編』(平井隆一編著 日本図書刊行会 2002) <910.268/MA>
- ・『松本清張書誌研究文献目録』(勉誠出版 2004) <910.268/MA>

そこで質問事項の典拠などを確認するため、照会いただいた図書館へ電話をして、次の事柄を教えてくださいました。

- ・探している本はI氏(朝日新聞社の記者だった人物)について書かれているもので、I氏は質問者の親戚にあたる。
- ・I氏は、数十年前に亡くなった故人。質問者の親戚が集まった機会にこのことが話題となり、もう一度その本を読んでみたくなった。
- ・昭和30年代に読み、岩波新書のような体裁だったと記憶している。

これらのことから、再度「I氏」「朝日新聞社」をキーワードに書誌・目録類、松本清張の著書で昭和30年代に刊行された当館所蔵資料について、新聞記者もしくは記者を主人公とする作品を調べましたが、依然として判明しません。インターネット上にも参考となる情報はつかめませんでした。

作品のモデルとされるI氏が朝日新聞社の記者であったことを手がかりに、朝日新聞社広報部へ照会してみましたが、I氏の経歴からは、松本清張の作品とのつながりは確認できませんでした。

「もしかすると、松本清張の著作という点が記憶違いでは...。」ということも頭をよぎりましたが、この時点で、これ以上の調査は不可能と判断。照会いただいた図書館に質問者への再インタビューをお願いし、一旦打ち切らせていただきました。

数日後、その図書館から電話が入り、再度のインタビューから、次の情報が追加されました。

- ・タイトルは、「黒」が付いていたはず。 ・出版は昭和32年頃 ・ハードカバーの本
- ・松本清張が朝日新聞社員だったときにI氏は同僚だった。

依頼を受けた図書館の方の熱意が伝わり、私にも何とか見つけ出したいという思いが強く沸き、これらの情報を元に、当館所蔵資料やデータベースの調査を再開しました。

当館所蔵資料で追加された情報に該当する資料を数点手元におき、内容をみていきました。

すると、偶然にも『黒地の絵』(光文社 1958) <F/MA> に所収の作品「額と歯」(本文p202)に「I氏」の記述を確認したのです。現物はわりと綺麗なまま保存されており、カバーの装丁など説明したところ、間違いのないとのことでした。該当の記述はほんの少しのものでしたが、求められた方にとっては、大切な思い出にもう一度触れることができました。

~同種の事例 番外編~

宮城県図書館では、『としょかん質問箱』というレファレンス事例集を発行しています。ある日、当館の所蔵資料として整理していた職員から「もしかしたら、ウチの資料が役に立つのでは...。」とそのNo.13(2004.11)の中に記された「HELP事例集」(宮城県図書館で良い回答を得られなかった、あるいは調査途中でいきづまってしまった事例)を見せられました。その事例は、

●1969年、中学一年の時、『中一コース』(学研)で作文を投稿したら特選に選ばれて掲載された。もう一度見たい。というものでした。当館には栗田書店から寄贈された昭和24年~49年に刊行された膨大な雑誌(一部未データベース化)があり、『中学一年コース』(中一コースの正式タイトル)のタイトルも含まれています。早速、宮城県図書館へ電話し、事例の内容を詳しく聞き、当館所蔵資料にあたりました。該当の投稿欄が目次からは特定できず苦労しましたが、幸運にも所蔵巻号に該当の作文が掲載されている部分を見つけ出し、複写を提供することができました。正に「協力レファレンス！」

## こんなのあります - いちおしレファレンス・ブック - 【16】 懐かしの歌を探す

1年ほど前に、「『 こんごうせ～きも みーがーかーずーばあ～』って歌（『金剛石』）なんだけどね・・・」と、いきなり電話口で浪々と歌いだされ、そのあとの歌詞を知りたい、というレファレンスを受けたことがあります。そのほかにも、「嗚呼玉杯に花うけて」「仰げば尊し」「一月一日」など、割と年配の方からと思われる、昔子どもの頃に歌ったという歌詞の問い合わせを受けることが多々あります。

今回ご紹介する新刊は、このような唱歌や童謡が載っている『日本童謡事典』（上笙一郎編 東京堂出版 2005.9 463p 23cm ¥4,800）

<767.7/NI>です。 ※< >内、当館請求記号

編者は児童文学や児童文化の研究者で、帯には「本邦初<日本の子どもの歌>の大事典 代表的なわらべ唄・唱歌・童謡の作品とその作者を主軸に、事項解説にも力を注入。歌詞のすべてを収載し、作品の成立事情から歌曲的価値・歴史的意味までを、過不足なく解説。」とあり、歌詞以外にも歌の背景などのレファレンスにも対応してくれそうです。

楽譜はついていないのですが、昨年出版されたばかりの本書は、お値段もサイズもコンパクトながら、十分心強い1冊になりそうです。

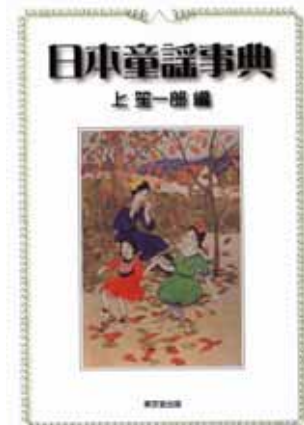
ちなみに多巻ものですが、子どもの歌を調べるときに使える資料には、『童謡唱歌名曲全集』（田村虎蔵〔ほか〕編 名著出版 1989）<767.7/D>や、『日本童謡唱歌大系 全6巻』（東京書籍 1997）<767.7/NI>などがあります。どちらも歌詞と楽譜が載っています。

前者は昭和6-7年に京文社から出版された全8巻の同全集と、『明治回顧軍歌唱歌名曲選』（堀内敬三編 京文社 1932）を続編として、全9巻を復刻したもので、約1500曲収載され、まさに当時の童謡・唱歌の大集成といえます。

後者は、19世紀後半から20世紀終わりまでの約130年間の子どもの歌を、それまで出版された多くの曲集の中から詩と曲の両面とも綿密に選定・編集作業を繰り返して完成させた20世紀の総決算としての大系ということです。

また当課には、子どもの歌に限らず、その昔流行っていた歌謡曲の問い合わせも多く寄せられ、『全音歌謡曲全集』（全音楽譜出版社 19-- ）<767.8/Z>も何度活用したことかわかりません。かと思えば、なかなか歌詞の載っている資料が見つからず、昭和20年代の『明星』の付録の歌謡曲集から探し出したこともありますし、またあるときは、外国の歌謡曲の原語の歌詞を調べているということで、ネット検索や他館への照会を繰り返し、レコードやCDの歌詞カードまで調査して探し出したこともあります。

他のレファレンス同様に、曲探し・歌詞探しも、可能性のある資料を一点一点当たらなくてはいけない苦労はあるものの、探し当てたときの利用者の喜びもこちらの喜びもまたひとしおで、苦労しがいのあるレファレンスのひとつとなっています。



## 市町村のみなさんからの発信 【14】

### レファレンスに王道なし

登別市立図書館 館長 清野 良憲さん

利用者の了解を得て最近の事例をひとつ紹介します。

利用者の U 氏は、たまたま手にしたミュージアム新書『北の水彩』の口絵「1. 高橋勝蔵<桑港海岸>1892」（伊達市開拓記念館蔵）に目を留め、風景が室蘭に似ていることと、この絵がどうして伊達市にあるのか興味を持った。そこで内容にふれてみると、高橋勝蔵は 1860（万延元）年宮城県の大塚に生まれ、家族と共に北海道開拓団に従い現在の伊達市に移住した。25 歳のときに絵を志して渡米、シカゴ万博で一等金賞を受賞し、1893（明治 26）年に帰国した翌年、第 6 回明治美術展に出展し、黒田清輝らと共にその新鮮な作風で大いに注目されたという。

（それにしてもどうして、黒田清輝のように有名ではないのだろうか）

最初、U 氏は『北の水彩』で紹介されている道立近代美術館の紀要（1995）（平利弘氏の「明治国家の近代化と高橋勝蔵」）を求められたので、紀要と高橋勝蔵の作品が掲載されている図録『明治の洋画』を貸出した。

次に参考文献の「高橋勝蔵の絵画」の所蔵調査を依頼されたので、道立近代美術館に問い合わせたところ、執筆者の平利弘氏は道立帯広美術館に転勤したとのことで、直接帯広の同氏にお尋ねしたところ、快く関連部分のコピーを送ってくださった。

U 氏は<桑港海岸>の実物を見るべく伊達市開拓記念館を訪れたものの、絵は伊達市噴火湾文化研究所に移管され、見ることは出来なかったとのこと、前伊達市立図書館長が同研究所に異動したことを聞き及んでいたので問い合わせたところ、図書館で『北海道洋画界の草分 高橋勝蔵の略歴』を所蔵していることが判明し、コピーが入手できた。

さらに U 氏は『演劇研究』第 28 号・坂本麻衣氏の論文「高橋勝蔵の舞台背景製作」によって、高橋勝蔵が『歌舞伎』49 号（明治 37 年 5 月）「歌舞伎座一二番の背景に就て」を執筆しているのを見つけ、U 氏からそのコピーを入手できないか依頼された。

道立図書館参考調査課に所蔵調査をお願いした結果、国立国会図書館で所蔵していることがわかり、現在そのコピーをお願いしているところである。

以上が今回の資料の追及のおおまかな流れです。U 氏は昨年退職され、この高橋勝蔵の絵のことがきっかけで、図書館の利用を始められたとのこと。私はこれまで何度か図録『明治の洋画』でこの絵を見ているはずなのに、全然気にも留めず、漠然と見過ごしていたことになりました。

多分、レファレンスの面白さは、自分の知っていることを再確認することと、自分の知らなかったことを記憶にとどめ、それを増やしていくこともあるのではないかと私は思います。今回、調査のお手伝いをして、高橋勝蔵の存在を改めて認識した次第です。

レファレンスといっても、普段は資料の所蔵調査が圧倒的に多く、インターネットの普及によって、それは以前とは比べられないほど容易にはなった、とはいうもののキーワードだけでは十分に探しきれないものも多々あります。

レファレンスに王道なし、自戒も含めてただただ多くの本に目を通すしかないのですが、次に紹介する本は、これからレファレンスに携わっていく皆さんの役に立つと思われしますので、ぜひ読んでください。

新宿中村屋の相馬愛蔵・黒光夫婦とその家族を縦系に、明治から昭和にかけての政治、思想、芸術、文化、教育などさまざまな分野の人、事件、出来事を横系に、臼井吉見が 10 年の歳月をかけた大作『安曇野』（全 5 巻）がそれです。今年度大仏次郎賞を受賞した中島岳志著『中村屋のボース』も大いに関連しています。

---

# 《特別寄稿》 ‘コピー・レファレンス’ の悪夢

筑波大学図書館情報メディア研究科 教授 山本 順一 さん

---

## 1. 目録データとコピー・カタログニングの普及

日本は常に地震、台風、洪水、雪害など豊富な自然災害の発生、到来に悩んでいます。その都度、何らかのかたちで図書館も被害を受けています。図書館蔵書に甚大な被害があったことを知った市民は、図書館に本の寄贈を申し出ることが少なくありません。このとき、市民の好意にまったく考慮を払わない図書館職員が少なくありません。ひどい職員になると「受入れてもかまいませんが、目録データのオカネもあわせてください」と言います。かつては、目録作業は図書館の基幹業務でした。しかし、いまは蔵書として受入れれば、TRC-MARCなどが付いてきます。大学図書館では、新規に図書や雑誌を受入れた場合、国立情報学研究所が提供するデータベースに照合し、該当する目録データをダウンロードし、自館データをそれに付加します。大学図書館でも、伝統的な目録作業をすることはほとんどなく、コピー・カタログニングが一般的です（上にあげた市民からの寄贈図書は国会図書館等のWeb-OPACあたりからコピー・カタログニングすれば、当面の用には十分使えます。職員に司書資格はなくても、司書資格を持つボランティアはワンサといます）

図書館業務にコンピュータが進出する過程で個々の図書館で行なってきた目録作業はコピー・カタログニングに置き換わったり、目録データの頒布となったりし、図書館職員の分類・目録に関する知識・技能は確実に低下してきたのです。図書館法の定める司書講習の科目においても、分類・目録、すなわち資料組織の授業時間は半減しました。図書館業務の合理化に伴う人材と知識の劣化です。

## 2. コピー・レファレンス (?) 整備の方向性

レファレンスサービスについて考えてみましょう。いま和洋の最新のレファレンスサービスに関する本をひもとくと、デジタル・レファレンス ライブ・レファレンス 週7日24時間レファレンス という言葉が躍っています。従来、主としてカウンターや電話で受付けてきた参考質問が、eメールやチャット、電子会議システムなどを利用してインターネット環境の中で行なわれる状況になりつつあります。市民から寄せられた参考質問とそれに対する適切な回答にかかわる多くの事例がデータベースに取り込まれ、ただちに参照できる仕組みが目指されています。また、インターネット環境では相対 (face-to-face) の関係は必要ないので参考質問を受付ければ、そのテーマを得意とする専門家ないしはサブジェクト・ライブラリアンに転送、引き継ぐことができます。最寄りの図書館職員、図書館のホームページの担当者は 仲介 に徹するだけでなにもなくていいのです。

このようにお話してくれば、分類・目録の世界で図書館職員が何も（あるいはほとんど）分類・目録について知らなくてもよくなったように、今後レファレンスサービスの世界でもレファレンス・ツールや主題知識をもたなくてもやっていけそうな気がしませんか？ 見事な 無料貸本屋 公設無料インターネットカフェ になりさがることになります。業務のほとんどすべてが単純労働化するとここに指定管理者制度の導入に障害を見出すことは出来ません。

## 3. 新しい時代の レファレンス・ライブラリアン 像

ひるがえって、図書や雑誌が主体の紙媒体図書館で参考図書を駆使した従来型のレファレンス・ライブラリアンについて、わたしは授業中にこのようなことを言うのが常でした。「ライブラリアンは物知りである必要はないし、実際に物知りのライブラリアンはほとんどいない。世界中のライブラリアンで、テレビのクイズ番組に出演して、素晴らしい成績をあげ、ハワイやロマンチック街道、アメリカ西海岸のご褒美観光旅行を射止めた人はいない。ライブラリアンは知識そのものではなくて、その知識にたどりつく方法、探索手法という知識（昨年カナダで亡くなられたわたしの恩師、藤川正信先生はこれを 第二の知識 といわれていました）をもたねばならない」と。

インターネット情報環境では、市民は手近なPCに飛びつき、種々様々な図書館のWeb-OPAC、GoogleやYAHOO!といったサーチエンジン、各種ポータルサイトを利用すれば、これまでの大半の参考質問が解決できそうです。図書館に来館する必要はなさそうに見えます。図書館ポータルも驚異的な威力を発揮するかどうか不分明です。うえに紹介した様々な態様のデジタル・レファレンスの有効性もライブラリアンのひとりよがりの部分が皆無とはいえないようにも思えます。

ここまでの話で、レファレンスサービスはお先真っ暗との印象をもたれたかもしれません。しかし、案外簡単などころに新しい時代のレファレンス・ライブラリアン像があるように感じています。それは頼りになる図書館のおねえさん、おばさん、おじさんというイメージ、幻想を利用者市民に広く持たせることだと思います。インターネットでドンビシャリの情報を得るのはなかなか難しいものです。市民が親しみをもって尋ねてきた参考質問に対して、サイバースペースとリアルワールドを瞬時に涉猟し、迅速かつ丁寧、親切に、その市民のニーズとレベルに見合った回答を与えることができるという神話を捏造できれば、レファレンス・ライブラリアンは不滅の存在となるでしょう。時代は、ビジネス情報、医療情報、法情報など、専門店型レファレンス・ライブラリアンも求めています。図書館で働いているみなさん、これから図書館の世界に健気に飛び込もうとされている若い人たちのたゆまぬ努力の総量、積分量がレファレンスサービスの明日を開きます。そのとき積極的な図書館アドボカシーも不可欠です。

### 山本順一さんのプロフィール

所属機関：筑波大学 図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻 教授

研究分野：1 情報システム学(含情報図書館学) 図書館情報学

2 公法学 行政法学

主な論文：船橋市立図書館蔵書廃棄事件最高裁判決の検討(2005.7.14) (特集 図書館の自由--船橋事件判決から見えるもの) 『みんなの図書館』通号 346 2006.2

学校図書館と著作権 (特集 1 学校図書館と著作権) 『学校図書館』通号 659 2005.9

動向レビュー デジタル知的財産権の権利保護に対する新たな国際的潮流 『カレントアウェアネス』284 2005.6.20

デジタル著作権の構造矛盾と図書館--ウシを呑み込もうとするカエル 『九州大谷情報文化』33 2005.3.1

アメリカの知的自由と図書館の対応に関するひとつの視角--愛国者法から図書館監視プログラム、そしてCOINTELPROに遡ると (特集新しい枠組みとしての図書館の自由) 『現代の図書館』42-3 通号 171 2004.9

図書館情報専門職養成教育プログラムのためのガイドライン 2000年版 『図書館雑誌』98-3 通号 964号 2004.3

科学技術文献、学術情報と著作権--専門図書館の視点から (特集 知的財産権) 『専門図書館』205 2004

主な著編書：『図書館と著作権』日本図書館協会 2005.10

『情報メディアの活用』放送大学教育振興会 2005.6

『レファレンスサービス演習 改訂版』理想社 2005.4 (新図書館情報学シリーズ)

『憲法 問題点を解説する』勉誠出版 2003.4

『学校経営と学校図書館』学文社 2002.5 (メディア専門職養成シリーズ 1)

『図書館法規基準総覧 第2版』日本図書館協会 2002.4

『図書館情報学の創造的再構築』勉誠出版 2001.7

『資料・メディア総論』学芸図書 2001.6

『市民のための行政法入門』勉誠出版 2001.5

『電子時代の著作権』勉誠出版 1999.10 (図書館・情報メディア双書 5)

参考：ReaD研究者DDB <http://read.jst.go.jp/search.html>

国立国会図書館NDL-OPAC <http://opac.ndl.go.jp/index.html>

## Librarian's Box (ししょぼ) 【13】

翻刻資料の探し方 - 日本史を中心に - (翻刻資料の所在を知る参考図書)

「ある時代小説の参考文献に『藩家世実紀』というものが出てくるが読むことはできるか」とか「ルーツ調査で先祖に関係する 県史に『寺沿革』について書いてあったが、見ることは出来るか」といった質問は比較的好くあるケースです。

このような場合、その資料の活字本があるかどうかが入手の難易度を決定付けます。写本でしか存在しない、あるいは刊本もあるが江戸期のものというのでは、所蔵先に出向くしかありません。

ここでは翻刻資料(明治以降に活字化された資料)の効果的な探し方を、当館所蔵資料により紹介します。 < > 内、当館請求記号

### 1 『国書総目録 補訂版 全9巻』(岩波書店 1989~1991) <026/K0>

このような場合、いの一番に手に取るのがこの資料です。国初から慶応3年までに日本人の著編撰訳した和文・漢文書籍 50万項目 170万書誌に上る 国書の総合目録です。ただし原則として一枚の書画、絵図、地図、古文書、拓本などは収録されていません。書名の五十音順に配列し、別称・分類・著编者・成立などが記され、また、(写)(版)(活)の記号により、写本・版本の所蔵先や活字本の情報を知ることができます。

翻刻は単独で行われることもありますが、多くの場合、『群書類従』とか『史料大成』など、叢書の一部に収められています。本書では第8巻に「叢書目録」があり、各叢書に収録される細目を知ることができます。第9巻は「著者別索引」です。

### 2 『全集・叢書細目総覧 全3巻』(国立国会図書館参考書誌部編 紀伊国屋書店 1973~1989) <027.4/K0>

国立国会図書館が所蔵する、明治以降に刊行された全集・叢書に収録されている資料の細目集成です。配列は全集・叢書の五十音順になっており、内容の細目を見ることができます。「第1巻 古典編」が細目の総覧、これに対する細目の索引が「古典編索引」で、各資料がどの全集・叢書に収録されているかを知ることができます。「古典編 続」は、第1巻刊行以後に新たに出版されたものの細目総覧とその細目索引が収められています。「第1巻 古典編」は1970年まで、「古典編 続」は1971年~1985年までに刊行された全集・叢書を収録し、その数は合わせて約2,000になります。

### 3 その他の関連資料

『国書総目録』の続編である『古典籍総合目録 全3巻』(岩波書店 1990)の第3巻「書名索引・著者名索引」には「叢書細目一覧」があります。また『国史大辞典』(吉川弘文館 1979~1997)には主要な典籍・記録の項目があり、各項目の末尾には基本的な参考文献となる著書・論文・史料集があげられており便利です。「大日本古文書」「大日本史料」の項目ではそれぞれの内容一覧があります。

今回は図書資料を紹介しましたが、このような検索を効果的に行えるネット上のデータベースは、今のところ見当たりません。国会図書館の蔵書検索や「ゆにかねっと」(国立国会図書館総合目録ネットワークシステム)で検索しても探しきれないものがあります。そのような場合は当館に照会してみてください。

## デジタル・ライブラリアン講習会<北海道短期集中コース> 報告

### 図書館業務におけるインターネットの可能性

- (1) 情報検索 - 出版情報、サーチエンジン、ウェブサイト + 演習
- (2) 公共図書館における地域情報、ビジネス支援のサイト、リンク集 + 演習

講師：大串夏身氏（昭和女子大学）

このコマでは、レファレンスに有効な多数のお役立ちサイトと、それぞれの特性、違い、効果的な検索方法について詳しく学ぶことができました。テキストは60ページから成り、「WEB情報の検索」「書誌情報の検索」「事実調査の検索」の三部構成で、練習問題付きです。冒頭に最近の特徴として、次のように書かれています。

- 1 検索エンジンの機能が一層レベルアップした。
- 2 国立国会図書館、国立情報学研究所、総務省統計局などの機能が充実している。
  - (1) 検索エンジンに横断的な検索ができる機能が加わった。
  - (2) 国際子ども図書館の児童書総合目録では、あらすじのデータが大量に増加した。
  - (3) オープンアクセスの運動が広がり、学术论文のインターネット上での原文閲覧ができる範囲が広がった。
  - (4) 帝国議会会議録が公開された。
  - (5) OPAC が項目ごとに細かな検索ができるようになった。

まず「WEB情報の検索」では、サイト検索の基本や、いかにうまく検索エンジンを使うかが示されます。キーワード検索、カテゴリ検索、論理演算子を使った検索、画像・音声・動画等の検索、メタ検索エンジン、分野別検索エンジンなどです。

「書誌情報の検索」では、図書、デジタルアーカイブ、政府刊行物・自治体発行資料、規格・テクニカルレポート類、雑誌、新聞と新聞記事、その他（地図、音楽資料、国立公文書館の資料）の書誌情報を探す有効サイトと特性が細かに書かれています。

「事実調査の検索」では、特定の事実、自治体・官公庁関係、地方自治体や地域、外国の基本情報、法令・条例・判例、法律相談事例、条約・憲法等、地図、人物、ビジネス情報、団体、統計、芸術・美術・映画、交通旅行関連、ウイルス・セキュリティ、気象、自然科学・工学・医学情報等、Q&Aのサイトについて詳述されています。

このテキストを基に、大串先生が笑顔でどんどん講義と演習を進めていきました。この詳細なテキストが手元に残っただけでも、参加して良かったと思う程です。恥ずかしながら、知らないサイトが多々ありました。また、日頃よく使っていたものでも、初めて知った高度な検索技術というものもありました。検索エンジンひとつとっても、いかに自分が狭い使い方しかしていなかったかを反省しました。都立中央図書館時代のお話が聞けたのも収穫でした。テキストをお見せできないのは残念ですが、次のサイトに、講師陣のひとりである慶応大の原田隆史先生と大串先生の過去のテキストが公開されています。ご参照ください。

デジタルライブラリアン講習会 (<http://www.slis.keio.ac.jp/~ushi/dla/>)

信頼でき、便利でかつ無料のサイトを活用しない手はありません。冊子体もネットも使いこなせるデジタル・ライブラリアンを共に目指しましょう。

注：今回参加報告した講義・演習は、2005年9月4日・5日に行われたものです。



## 課員のつぶやき - 日々の業務からの短信 - 【15】

### 『北海道雑誌新聞総合目録』編集作業を終えて...

昨年9月に3年ぶりに各市町村立図書館(地区図書館)への購入雑誌・新聞調査を実施しました。データ集約に時間がかかりましたが、現在修正を行い、もう少しで完成します。総タイトル数は、雑誌1,011タイトル、新聞78タイトル(原紙・縮刷版等は合わせて1タイトル)です。お忙しい中ご協力いただきありがとうございました。

さて、昨年からのデータ修正はひとり電算室にこもっての孤独な作業でした。今回は、タイトルの増減が激しく、各図書館の苦勞を垣間見たような気がします。

逐次刊行物は、内容の速報性や時代反映されやすい点、多くの執筆者の多角的な記事の掲載、継続性等が特徴であり、購読を決めたら半永続的に提供されるのが通常です。

しかし、購入決定時と今とでは利用のされ方はどうなっているのか。今回『逐次刊行物 改訂第2版』\* を読みながら興味深く編集させていただきました。

同書によると、雑誌の選択基準は、専門家による推薦 抄録誌・索引誌の採録リスト調査 利用調査(年間5回以上他館に協力依頼する資料は自館で備える例等) 引用頻度調査 総合目録や他館所蔵目録の調査が挙げられています。

については、先日、市町村図書館職員レファレンス体験研修を受けた方の一人が言われたように、「他館から何回も借りるため購入決定した途端、その利用者が来なくなった」等、かなり利用者のニーズというのは流動的だと思います。しかし娯乐的・趣味や嗜好に関する雑誌は、「個人で買えばよい」という見方もありますが、借りるか買うかは、あくまで利用者個人の判断です。図書館法第2条で「...レクリエーション等に資することを目的とする施設で...」とされていることから図書館の本来の機能の一つとして考慮すべきともいえます。よって、市町村図書館においては、以前の「タイトルの変更をみだりに行わない」から「現在の利用者の要求を重視し、年度ごと収集タイトルの見直しをする」傾向になっているようです。そう考えると今回の調査のタイトルの増減に納得。読まないから予算を削るのではなく、一方ではより読まれる本を模索していくことが必要といえます。 に関して言えば、評価の定まったものを見極めるためには参考になると思いますが、そのかわり自館にある雑誌はどの館にもあり、ない雑誌はどこにもないという特色のないものになってしまいます。今回の目録をみると、1館のみ収集という資料が増えてきており、心強く思います。

県立レベルの図書館としては、まず新聞・雑誌の総合目録を作成することが重要だと思っています。最低限揃えなければならない雑誌・新聞のほか、限られた予算の中で「利用される資料の層を厚くする」ようにタイトル数を増やすとすれば、どの館がどのような資料を収集し、保存しているかを把握する必要があります。それと同時に当館においても市町村立図書館からの除籍雑誌の収集等を進めていかなければと思っています。

今回の総合目録については、今年4月に再度タイトル変更の有無のみ調査を行いますが、その際、皆様にご利用状況やご意見を伺いたいと思います。地方版の区分や当館(又はそれ以外で)購入雑誌・新聞リストを掲載したらどうか等、もっと利用しやすい環境を検討していきたいと思っていますので、これからもご協力をお願いします。

\*参考・引用文献：『逐次刊行物 改訂第2版』光斎重治〔編著〕 日本図書館協会 2000(図書館員選書・5)

## 市町村図書館職員レファレンス体験研修(レファ研)

～新年度もステップアップを目指しましょう～

市町村の皆さんと共にステップアップを目指す“レファ研”も実施から丸5年が経過しました。今号の“News”でもお知らせしましたが、延べ78名の方に受講していただき心より感謝申し上げます。

当研修は、受講者の希望する日程で、その内容・カリキュラムも要望により組まれ、マンツーマン形式で行ないます。また、より能動的に参加していただくため、事前に宿題(受講者の図書館資料で解決するレファレンス演習課題)も提示する当館独自の研修事業です。

受講の申込みは、希望する日の概ね一か月前にいただきます。その後、受講者が勤務する図書館の規模や経験年数等を勘案し、課員全員で、講義の内容や組み立て方を綿密に協議します。5年間の積み重ねがあり、いくつかの講義については、形式・方法が固まっているものもありますが、受講される方の状況は様々ですので、マンネリにならぬよう毎回工夫を凝らして、より良いものになるよう努めています。

講義の内容で希望が多いものには、参考調査課におけるレファレンスの流れツールの評価と利用(基本ツールの紹介) レファレンスインタビュー 有効なウェブサイト情報 が上げられます。は、実際に当館に寄せられたレファレンスが、どのように処理されていくのかが分かり、当館を身近に感じていただくきっかけにもなっています。は、基本的な参考図書の使い方を知り、また市町村では収集しない当館ならではの参考図書を実際に手にすることができます。の希望が多いのは、やはり図書館の利用者から、いかに質問事項を聞きだすのかが、レファレンスサービスにとって大変重要なポイントとなる現われといえます。については、図書館でも積極的に使いこなしていかなければならない“ツールの一つ”となっている反面、なかなかその情報が見つみにくい点にあります。実際、受講された方から教えられた有効なサイトはいくつもあります。そこで1点「こんなあります 番外編」

『ニッポニカ URL セレクト 2004-05 上・下・索引巻』(ネットアドバンス 2004.8 3冊 30cm ジャパン・ナレッジブックス ¥38,000) <547.8/N1/H16>

世の中に100億あると言われるインターネットサイト。本書は、その玉石混淆の中から、「小学館の『日本大百科全書(ニッポニカ)』の編纂作業の過程で執筆者および編集部が参照していたデータをその基礎とし、「信頼するに足るサイトを厳選して一覧しやすい形で排列し、各サイトの内容を要領よく紹介する解説文を備えた」「時代の要請に十分にこたえるリファレンス資料をめざして誕生したURL集」です(上巻「はじめに」より)。国内・外のサイトを3万以上集めていますが、索引でかなりの事項を網羅してあるために、必要なサイトの探しづらさは感じません。「Google」や「YAHOO!」などの検索サイトでキーワードを入れて調べるだけでも、かなりの率で調べたいことのヒントを得ることはできますが、「このことを調べるにはどこに聞いたら!?!」というようにピンポイントで辿り着きたいときには、このツールが役立ちます。

図書館資料を効果的に使い利用者の調査を支援するレファレンスサービスは、「便利な図書館」をアピールできます。様々な要望を持った一人一人の利用者にサービスを提供するためには、常に私たち図書館職員のスキルアップが求められます。

“レファ研”は、来年度も実施します。積極的な参加をお待ちします。

共にステップアップを目指しましょう!

# NEWS

## 1 今年度レファ研の全日程が終了

「市町村図書館職員レファレンス体験研修」(レファ研)の今年度の日程が2月で全て終了しました。今年に入ってからは1月に恵庭市から7名、旭川市から2名、2月に旭川市から2名、石狩市から3名が受講しました。これで平成13年度から始めたレファ研の受講者は延べ78名になりました。

## 2 国会図書館HPにテーマ別調べ案内項目が新規追加

国立国会図書館HPにある「テーマ別調べ案内」に、「外来生物」をはじめ、新たに18の項目が追加されました。事項調査等に便利なサイトが選りすぐりで集められています。普段の調べ物などに活用してみたいはいかがでしょうか。

■国立国会図書館HP：テーマ別調べ案内 <http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme.html>

## 3 『判例時報』に「船橋市西図書館蔵書廃棄事件」判決録

『判例時報』(日本評論新社)1910号(平成18年1月11日号)p.94-99に、昨年7月の最高裁判決「公立図書館の職員が図書の廃棄について不公正な取り扱いをすることと当該図書の著作者の人格的利益の侵害による国家賠償法上の違法」が掲載されました。これは平成13年に当時船橋市西図書館に勤務していた司書が某団体の著書を除籍基準に基づかずに廃棄した事件であり、図書館員の倫理に関わる問題として社会的にも大きく報じられたものです。

## 4 「著作権法第31条の運用に関する2つのガイドライン」まとまる

日本図書館協会からも委員が出ている「図書館における著作物の利用に関する当事者協議会」で今回、相互貸借で借り受けた図書等を著作権法第31条1号により複製できるようにする「図書館間協力で借り受けた図書の複製に関するガイドライン」と、事典の一項目全部の複製についての「複製物の写り込みに関するガイドライン」の2つがまとまりました。いずれも2006年1月より実施可能となっています。また、日本図書館協会のホームページでは「Q&A」の形で、運用の際に出てくると思われる細かい点についてもまとめられています。

■日本図書館協会HP：著作権法第31条の運用に関する2つのガイドライン

<http://www.jla.or.jp/fukusya/index.html>

## 5 道内の司書教諭「読書指導体験記コンクール」で優秀賞受賞

集英社と財団法人一ツ橋文芸教育振興会が主催する中学校・高等学校の先生方を対象にした「第15回読書指導体験記コンクール」で、本誌前号に寄稿をいただいた札幌市立月寒中学校の三上久代さんが、中学校の部で優秀賞に選ばれました。体験記は集英社のHPで全文を読むことができます。

■〔集英社〕第15回読書指導体験記コンクール・入賞者一覧

[http://www.shueisha.co.jp/mesena/lead\\_2006/nyusho.html](http://www.shueisha.co.jp/mesena/lead_2006/nyusho.html)

## 6 平成17年度北海道教育庁専門職員研修会開催

去る1月17～18日に道庁別館において、平成17年度北海道教育庁専門職員研修会が行われました。これは学芸員や司書などに専門知識や技能を習得させ、職務遂行能力と専門職としての資質向上を図ることを目的とするもので、当館からは当課伊藤を含め6名が参加しました。ワークショップ形式の課題研究などもあり大変興味深く学ぶことができました。

## 7 札幌篠路高校で「くすみ書房」社長が講演

北海道札幌篠路高等学校では今年度「活字をめぐる冒険者たち」と題して、広

く一般の方を対象とした図書館講座を3回開講しました。第3回目となる2月3日には「なぜだ!?売れない文庫フェア」などのユニークな企画で注目を集める「くすみ書房」社長の久住邦晴さんが「町の本屋の再生をめざして」という講演を行い、当課からは伊藤が参加しました。話題の新刊に押されて埋もれつつある良書にスポットライトを当てる久住さんの企画は、町の小さな本屋さんの生き残りの方向性として全国的にも注目されており、参加した人たちにも好評でした。

## 8 文科省「新しい時代の社会教育」パンフレット作成

文部科学省では、新しい「公共」の形成を目指し、様々な学習活動の充実のために支援を行っていますが、今回その一環として「新しい時代の社会教育」のパンフレットを作成しました。これには各分野の社会教育に関する先駆的な活動事例が集められていますが、図書館の活動として、伊万里市、鳥取県、市川市の事例、北海道の活動として旭山動物園や羽幌町のボランティアの事例が紹介されています。これからの図書館のあり方を考えるうえで参考になりますので、ホームページを覗いてみてはいかがでしょうか。

■文部科学省HP：「新しい時代の社会教育」(パンフレット)について  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/shakai/06020706.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/shakai/06020706.htm)

## 9 「北の図書館」のホームページ見てますか？

当館の元館長岩城信吉氏を中心とした「北の図書館5人の会」では、冊子『北の図書館』(平成15年7月創刊、現在まで第5号まで刊行。不定期刊)を発行していますが、あわせてホームページも開設しています。このサイトには『北の図書館』のバックナンバーをはじめ、トピックス、ニュース、お知らせなどの旬な情報とともに、「資料の棚」のコーナーでは、図書館運営に関わる様々なデータが満載です。ぜひ一度アクセスを。

■北の図書館HP：[http://homepage2.nifty.com/ki\\_tanotosyokan/](http://homepage2.nifty.com/ki_tanotosyokan/)

## 10 特集：レファレンス！一歩前へ

雑誌『みんなの図書館』(教育史料出版会)のNo.345(2006年1月号)で、標記の特集が組まれています。内容は「法律・行政情報」に的を絞り、『リーガル・リサーチ』(日本評論社)の著者のお一人である村井のり子さんや積極的な行政支援サービスを展開している立川市立中央図書館の斎藤誠一さんの論文が掲載されています。ご一読を！

### 1.1 情報源ア・ラ・カルト

もう一つ、雑誌の情報から、『専門図書館』(専門図書館協議会)で標記の連載がNo.205(2004-)から続いています。「第1回 書籍・雑誌の情報を探す」から始まり、毎回、人物情報、法律情報、統計、企業情報などのテーマで、有効な情報源を冊子体、CD-ROM、インターネットから紹介しています。私たち公共図書館の職員にも役立つ連載です。

### 1.2 「貸出文庫」3タイトル増えました。

平成17年度、「貸出文庫」として次のタイトルを収集しました。平成16年3月にお送りした『貸出文庫目録』(追補版)に追加してご利用願います。

- (1)一寸先はヤミがいい 山本夏彦著 新潮社 2003.2 <請求記号：9>
- (2)海猫 谷村志穂著 新潮社 2002.9 <請求記号：F>
- (3)金毘羅 笙野頼子著 集英社 2004.10 <請求記号：F>

## 編集後記

DL講習会報告にも書きましたが、有効サイトは日々進化しており、日頃のチェックが追いつかないと、折角便利なものを使わずにいた・・・ということになるんですね。気をつけたいところです。(ひ)

今号で「News」を担当しましたが、こうして図書館関係のニュースを集めてみると最近のものだけでも結構いろいろな話題があって驚かされます。北海道だけに限らず、今は図書館界全体に大きな変化が訪れているのではないのでしょうか。社会にとって図書館の役割とは何なのか、もう一度考えてみるのにちょうど良い時期なのかもしれません。(T)

平成17年度の最終号をお届けします。市町村の皆様方のご協力に心からお礼を申し上げます。来年度も新たな試みに挑戦します。乞うご期待!(S)

レファレンスで必死に資料を探していると、思わぬ資料に思わぬ事項が載っているのを発見することがあります。「あのときにコレを見ていれば・・・!」と思うことも。今年度最後のレファ研で「宿題」を担当したり、今号で「こんながあります」を書くにあたり、当館の参考図書を改めて見直す機会があったのですが、やはりまずは自館資料をよく知ること、そのためにはまず手に取ってみること、と実感しました。(I)

今年度は、利用講座、館内ツアー、市町村図書館職員レファレンス体験研修、雑誌・新聞総合目録の編集、『Do-Re』原稿の締め切り等数々の怒濤を乗り切りました。緊縮財政の中ですが、来年度も事業の形を変えつつ、努めていきますのでよろしくをお願いします。(K)

今号は、なんと言っても筑波大の山本順一先生です。北海道での、とある研修会にいらっしやっただけに思い切って声をかけ、ご寄稿をお願いしたところ、快く引き受けてくださいました。多謝! 新年度も更なる内容の充実に努めます。レファ研もヨロシク。(宮)



### Do-Re(どうれ)の由縁

“どうりつとしょかんレファレンス”の  
略から名付けました。

しかしながら

“どれどれレファレンス”からの説もあります。

THE REFERENCE NEWSLETTER OF HOKKAIDO PREFECTURAL LIBRARY

## Do-Re

北海道立図書館レファレンス通信 23(通巻27号)

発行年月日 平成18年3月9日

編集 北海道立図書館参考調査課

発行 北海道立図書館

〒069-0834 北海道江別市文京台東町41番地

TEL 011-386-8521 FAX 011-386-6906

<http://www.library.pref.hokkaido.jp>